

【実践報告】

教育実習Ⅰ（小学校）の報告

広島文教女子大学人間科学部

初等教育学科 教授 佐伯 育郎

1 はじめに

本実習（教育実習Ⅱ・Ⅲ）に臨むにあたり、実習生としての確かな心構えと教育実践力を養うことを目標とする。前年度に終えた観察実習（教育実習Ⅶ）の体験、各教科教育法の学びをふりかえり、教材研究や学習指導案作成の仕方などをより深く学習する中で、事前に取り組むべきことを明確にする。小グループに分かれてからは、教材研究・教材開発、模擬授業に取り組む。空きコマなどを活用して、模擬授業に関する担当教員との打ち合わせを行い、指導を受ける。本実習終了後は、グループのリーダーによる実行委員会を中心に教育実習報告会を企画・運営・実施し、学修のまとめとする。

2 実施のスケジュール

項目	時期	主な内容
事前ガイダンス、全体会Ⅰ・Ⅱ	1月～4月	<ul style="list-style-type: none">・2年次後期の1月下旬（もしくは2月初旬）に事前ガイダンスを行い、教育実習Ⅰの趣旨・スケジュールや春期休業中の課題などを確認し、グループメンバーおよびグループ毎の目標を決定する。・担当教員からのアドバイス（教材研究のポイント、教科書・指導書などの資料の活用法、指導案の提出・添削の方法など）、春期休業中の課題の提出、第1クール担当教員と模擬授業の打ち合わせなどを行う。・担当教師による示範授業と協議会を体験するとともに、今後の取組についての打ち合わせをグループ毎に行う。・ループリック（授業評価票）を配付し、評価規準（基準）、評価方法について担当教員から説明する。
グループ別模擬授業	4月～7月	<ul style="list-style-type: none">・グループ毎に模擬授業に取り組む。・教材研究・題材開発に取り組み、学習指導案を作成する。担当教員と模擬授業に関する事前打ち合わせを行う。模擬授業をするにあたり、事前に模擬授業の練習を自主的に行う。・グループのリーダーを中心に実習報告会実行委員会を組織し、4年生（前年度実行委員）との「教育実習報告会」引き継ぎ会を行う。
全体研究授業Ⅰ・Ⅱ、全体会Ⅲ、事後学修	7月～9月	<ul style="list-style-type: none">・代表者による模擬授業（模擬授業45分・研究協議会40分、代表者4人、2会場、2回）を行う。・教師による激励、教育実習Ⅰのふりかえり、課題（学習指導案のデータ・プリント、自己評価シートなど）の提出をする。・夏期休業中、グループ別で模擬授業に自主的に取り組み、後期の教育実習Ⅱ・Ⅲに備える。

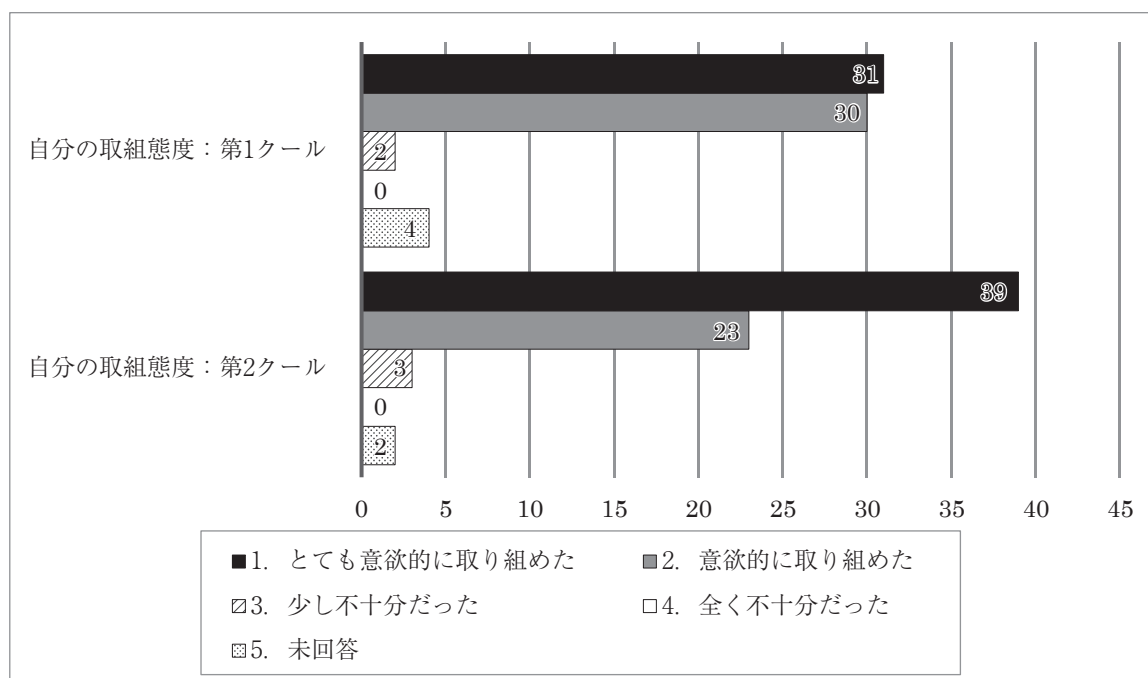
3 活動の概要

(1) グループおよび担当授業科目（受講者総数72人）

グループ（人数）	第1クール（3回）	第2クール（3回）	第3クール（2回）	第4クール（2回）
Aグループ（9人）	国 語	音 楽	理 科	体 育
Bグループ（9人）	音 楽	国 語	体 育	理 科
Cグループ（8人）	理 科	体 育	国 語	音 楽
Dグループ（8人）	体 育	理 科	音 楽	国 語
Eグループ（9人）	社 会	図 工	算 数	道 徳
Fグループ（9人）	図 工	算 数	道 徳	社 会
Gグループ（10人）	算 数	道 徳	社 会	図 工
Hグループ（10人）	道 徳	社 会	図 工	算 数

(2) 教育実習Ⅰ：中間地点振り返りシート（自己評価票）の集計結果（回答者67人、未提出5人）

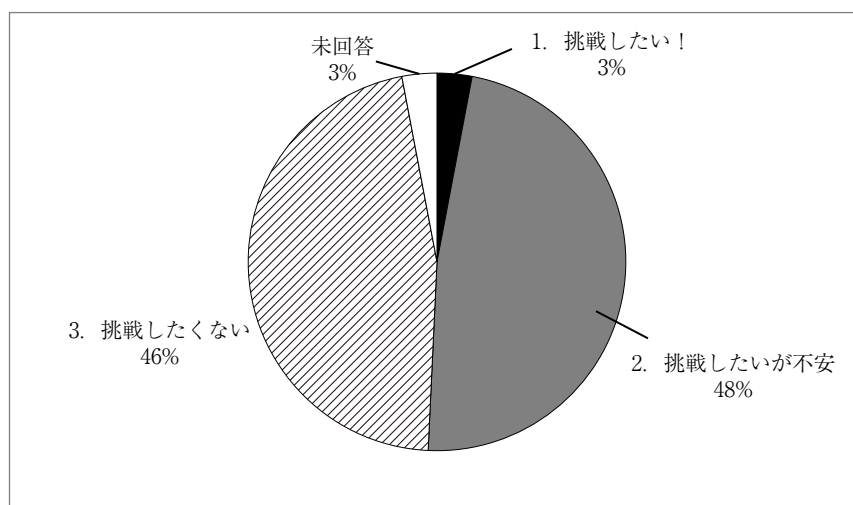
第2クール最終日である平成29年6月3日（土曜日授業）の第8講において中間地点振り返りシート（A4サイズ1枚の質問紙）の記述と発表をグループ毎に行った。第1クール、第2クールの自身の取組態度を4段階で学生に評価させた。結果はグラフの通りである。模擬授業を一度経験した第2クールの方が、第1クールよりも意欲的に取り組めたといえる。自身の取組についての成果と課題が明らかになるため、次の模擬授業への意欲が増すのではないだろうか。



【平成29年度・教育実習Ⅰ 中間地点振り返りシート 集計結果：取組態度（A～Hグループ）】

次に、第4クール後に2回行われる全体研究授業で代表者として模擬授業をしたいかどうか質問した。1. 挑戦したい、2. 挑戦したいが不安、3. 挑戦したくない、以上3つから選択させた。1と2については、授業を行いたい教科名も記述させた。結果は次の通りである。1. の回答が2人、2. の回答が32人、3. の回答が31人、未回答が2人という結果となった。この時点での代表模擬授業に対する立候補者は2人で

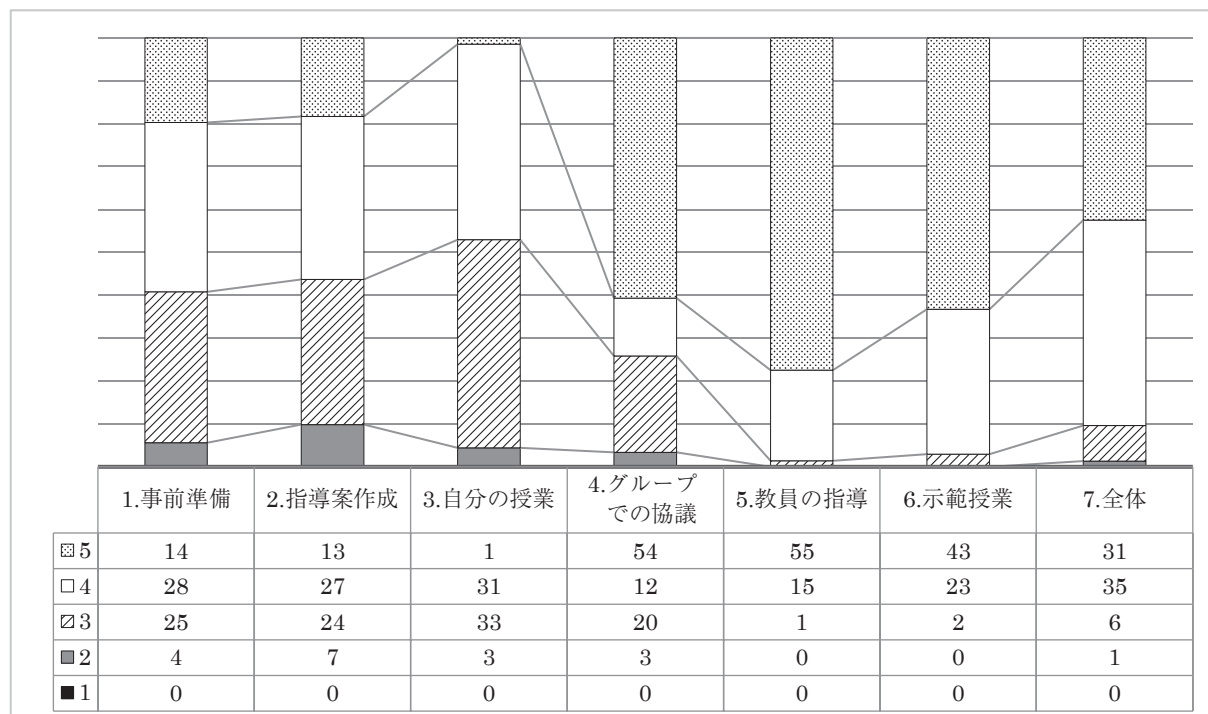
あったが、第3・4クールの間には2人が立候補し、代表者が4人となった。



【平成29年度・教育実習Ⅰ 中間地点振り返りシート 集計結果：代表模擬（A～Hグループ）】

(3) 教育実習Ⅰ：全体振り返りシート（自己評価票）の集計結果（回答者71人、未提出1人）

平成29年7月29日の最終講において自己評価票（A4サイズ1枚の質問紙）による調査を行った。1. 模擬授業の事前準備・教材研究等の取組、2. 学習指導案の作成、3. 自分の授業、4. グループでの協議、5. 担当教員の指導、6. 教員による示範授業、7. 全体を振り返っての7観点についての満足度を5段階（5が最高、1が最低）で学生に評価させた。結果はグラフの通りである。満足度は、5. 担当教員の指導、6. 教員による示範授業が高く、3. 自分の授業が最も低い結果となった。



【平成29年度・教育実習Ⅰ 自己評価票 集計結果（A～Hグループ）】

4 成果と課題

平成26年度から導入して部分修正したルーブリックを用いて、担当教員による学生の評価、学生による自己評価、学生間の相互評価に活用した。学生に対する最終的な評価・評定は、ルーブリックの結果そのままではなく、評定の境界に位置する学生については、教員による微調整を加えることによって修正した。担当教員による協議の上、学生の取組状況を考慮して評定を最終的に決定した。今年度の修正は比較的少なく、滞りなく最終評価が決定した。

前期の中間地点にあたる第2クールⅢ（3年次前期・第8講）では、グループ別に振り返りを行った。昨年度同様、第3・4クールの模擬授業に向けての指導を充実させるために中間地点振り返りシートを用意し、学生に記入させた。シートには「代表模擬に挑戦してみませんか？」という設問を設けており、「1. 挑戦したい！」「2. 挑戦したいが不安」「3. 挑戦したくない」の中から選択させているが、回答した学生の中には代表者として推薦する他の学生名を記入しているものも複数見られた。次年度は、代表者として推薦する学生と教科名を記入する欄を追加したいと考える。

今年度の全体研究授業の教科は国語・社会・理科・道徳であり、代表者はすべて立候補であった。積極性の高い学生達であったとともに、中間地点振り返りシートにも代表者として模擬授業をしたいか現時点での希望を記入させたことも、立候補への後押しになったのではないかと推察する。4月第2講における代表教員による示範授業（道徳・音楽）の質の高さも、その要因の1つではないだろうか。



【平成29年度・教育実習Ⅰ 第2講における教員による示範授業（道徳・音楽）】





【平成29年度・教育実習Ⅰ全体研究授業（上段：国語・道徳，下段：社会・理科）】

全体研究授業で45分間の模擬授業を行った代表者の1人は、「全体を通して、本実習への自信になった。本当は15分の模擬授業では1時間分の授業の流れという部分は分からないことも多いので、45分の授業の経験を積みたい気持ちがある。現実的に難しいかもしれないが、一度でも45分を経験すると、時間配分も分かるし、授業を作る時に削ることが大事であると気付くこともできるようになる。この模擬で学んだことを実習でしっかり生かしたい。」と述べており、大きな収穫があったことがうかがえる。今後も、教員による推薦がなくても立候補者だけで全体研究授業が成立することが望ましいと考える。

課題としては、全体研究授業の協議会の際に、児童役への対応、授業規律に関する指導に対する議論が集中した教科が見られたことが挙げられる。教育実習Ⅰにおける模擬授業では、生徒指導の要素もあるが決してそれが中心ではなく、より教科の本質に迫る議論となるよう、児童役の取り組み方も含めて指導し、次年度には改善していきたいと考える。